

## ハイデルベルク信仰問答講解説教 2.2 「完全な祝福」(2012年1月29日 礼拝説教)

## 【聖書箇所】

主よ、王はあなたの御力を喜び祝い／御救いのゆえに喜び躍る。あなたは王の心の望みをかなえ／唇の願い求めるところを拒まず〔セラ。彼を迎えて豊かな祝福を与え／黄金の冠をその頭におかれた。願いを聞き入れて命を得させ／生涯の日々を世々限りなく加えられた。御救いによって王の栄光は大いなるものになる。あなたは彼に栄えと輝きを賜る。永遠の祝福を受け、御顔を向けられると／彼は喜び祝う。王は主に依り頼む。いと高き神の慈しみに支えられ／決して揺らぐことがない。(詩編 21 : 2-8)

兄弟たち、皆一緒にわたしに倣う者となりなさい。また、あなたがたと同じように、わたしたちを模範として歩んでいる人々に目を向けなさい。何度も言ってきたし、今また涙ながらに言いますが、キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多いのです。彼らの行き着くところは滅びです。彼らは腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません。しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。(フィリピ 3 : 17-21)

## 【説教】

今日は、第22主日、問57-58を読みますが、まずは与えられた御言葉の方に注目したいと思います。フィリピ書3章17節に「兄弟たち、皆一緒にわたしに倣う者となりなさい」とあります。これはパウロがフィリピの教会の人たちに向けて述べていることですが、「わたしに倣いなさい」と言います。わたしをお手本としなさい。これは結構、自信たっぷりの言葉のように受け止められます。わたしたちは「わたしに倣いなさい」とはととてもじゃないけれども言えない。むしろわたしなんかお手本になりません。わたしよりあの人の方が信仰者としては経験もあるし、ずっと頼りになります。ついそのように考えてしましますし、その方が謙虚であるように思います。あるいは、ある人はもう一歩進んで、人ではなく、主イエスに倣う方がよいと考えるかもしれません。これはよく教会でも人間関係のことが問題になったり、そういうことで悩む人がいると「人間を見てはいけない。神さまだけを見て教会生活を送りなさい」と助言したりするものです。人に倣うものではない。神さまこそがお手本である。それは真理であり、確かにそうなのです。

でもわたしたちの信仰生活は、ただ神さまだけを見て成り立っているかという決断してそうではない。ここには見える形で教会という信仰者の群れがあります。同じ信仰に生きる者たちが集まって礼拝をまもり、互いに祈り合い、助け合って、信仰の歩みを続けております。皆さんが教会に導かれた時のことを考えてください。ある日、突然、信仰が与えられた。果たしてそうでしょうか。そこには何らかのきっかけとなる出来事があった。人との出会いがあった。その人の言葉、行いに触れ、教会に導かれるということがあります。そして教会の交わりの中で、やがて信仰が与えられる。そこには人との触れあいがあり、交わりがあります。人を見ないで神さまだけを見るというのは、本当はあり得ないことではないでしょうか。ですから神さまを見るということも、ただ神さまだけを見ているのではなく、人を通して、そこに神さまの働きを見ているのです。

そういうことを考えると、わたしたちの教会が、またその礼拝が、まさにここに神さまの働きを見るような、そういう生き生きとした礼拝、教会の交わりを形作っていくならば、そして新しい人たちが信仰を求めている人たちが、この教会の一員になりたいという憧れを持つような教会であるならば、それはまことに幸いなことであると思います。また洗礼が執り行われ教会に入会する者、また聖餐の恵みに与る者を見て、自分もあの出来事に加わりたいと思う者が起こされるならば、それは喜ばしいことだと思わります。ですから時々、わたしは聖餐の時に意識して、このパンと杯に与ることをよく見てくださいますと言ったことがあります。またこの教会では伝統として礼拝の時に長老

が最前列に座る。それは礼拝を整え、御言葉をまもるという観点もありますが、わたくしは同時にその長老の礼拝者としての姿勢を教会員が後ろから見て学ぶことでもあると考えます。そう考えますと、人を見る、礼拝者を見るのが信仰の大事な要素なのです。

パウロが、「わたしに倣う者となりなさい」という時に、パウロは自分の何を見てほしいのでしょうか。それは他でもないパウロの存在を通してそこに映し出される神さまの恵みを見てほしいということではないでしょうか。ほらこんなわたしでも神さまは用いてくださる。このようなわたしでも救われ、そしてこのように福音を宣べ伝えている。パウロに現された神さまの恵み、それによって救われ生かされている様をぜひ見てほしい。そして皆もこれに続いてほしいということではないでしょうか。そしてパウロは今日のところで最後にある衝撃的な言葉を述べています。それが21節「キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです」このパウロの言葉が根拠となって、今日の信仰問答の言葉になります。問57を読みましよう。

ここにわたしたちの究極的な目標があると申し上げてよいでしょう。それはキリストの体と同じ形になるということです。それは将来、終末、世の終わりにおいて、明らかにされることですが、わたしたちはそういう究極的な目標を持っているのです。もう一つ聖書箇所を挙げるとすると「愛する者たち、わたしたちは、今既に神の子ですが、自分がどのようになるかは、まだ示されていません。しかし、御子が現れるとき、御子に似た者となるということを知っています」(1ヨハネ 3 : 2)とあります。これも同じことですが、キリストに似るといふこと。創世記では人間は「神にかたどって造られた」と言います。このキリストのかたち、神のかたちいづれにしてもそこで人間は完成する。そういう完成形を望み見て、わたしたちは今、この世の歩みを続けているのです。

ルドルフ・ボーレンというドイツの神学者、牧師が、『憧れと福音』という本を書いています。「人間は、現在のあるがままの自分に留まるべきではありません。むしろ、今は、まだ自分がそうっていない者になるべきです。つまり新しくなるべきなのです」とこの本の冒頭に書いています。信仰は憧れることです。新しい存在への憧れ。今の自分にはなく、新しい人間。そして「キリストと結ばれる人はだれでも新しく創造された者なのです」(IIコリント 5 : 17)とあるように、信仰者というのは、その新しい人間として既に歩み始めている、そういう存在であると言うことができます。しかしまだ完成してはいない。

でもその完成を目指して確実に歩み出している。その目標ははっきりしているのです。キリストがその目標です。キリストこそが新しい人です。わたくしはパウロが「わたしに倣うものとなりなさい」という時に、そのパウロ自身の中にある新しい人、キリストの形に倣うことを言っているのではないかと思うのです。だからこそ「わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださる」と続けるのではないのでしょうか。そこを見てほしいのです。信仰者の中に始まっている新しい人を。

今日の間答では「身体がよみがえり」「永遠の命」と使徒信条の最後の文言を取り上げますが、よくいずれもまだ先の話、あるいは死んでからのことと受け止められています。しかしそれだけのことではありません。実は今を生きることも深い関わりがあります。「身体がよみがえり」とは、わたしたちの身体がよみがえりのことです。そのことをわたしたちは信じています。しかしそれはわたしたち人間が単独でよみがえりということではありません。何よりこのよみがえりはキリストのよみがえりであり、そのキリストに結ばれてわたしたちもよみがえります。ですから洗礼を受けてキリストに結ばれている者は、この地上の歩みからすでにこのよみがえりの命を生き始めるということなのです。わたしの中に新しい人が始まっている。これは問45キリストのよみがえりの間答の中で「その御力によってわたしたちも今や新しい命に生き返らされている」とはっきり告白されています。

バプテスマという教派がありますが、その教会の洗礼は全浸礼と言って水の中に頭まで全身を浸すのです。そしてそこから引き上げる。それは死んでよみがえりすることを表しています。罪に死に、新しい命に生きること。よみがえりの命に生まれ変わる、そのことを、洗礼を通して表すのです。わたしたちの教会の洗礼も、もちろんそのような意味を持っています。キリストに結ばれるということは、そのよみがえりの命を先取りして、今を生き始めるということなのです。それはこの世にはない新しさです。そこには憧れが起こって当然ではないのでしょうか。そういう新しさを内に秘めている。わたしたちはそういう存在であることをよく自覚する必要があります。

信仰生活のあきらめがあります。洗礼を受けても、何十年信仰生活が続けても何も変わらないと思っている人たちが多く。あるいは人間はそう簡単に変わるものではない。人の性格は変えることはできない。そう考えてあきらめ、惰性的にこの世の人たちと何ら変わらない日常を生きているのです。そう考えて現在のあるがままの自分に留まり続けているのです。でもわたしたちもまたパウロのように「わたしに倣う者となりなさい」と言える。それはただ表面的な行いか仕草ということではなく、内面的、質的な新しさを生きている。信仰者はそういう内側から出る新しさを持っているのです。年を重ね何歳になっても、いよいよ新しくなることができる。もっと謙虚に、もっと喜びをもって、感謝して生きることができる。そういう全く新しい命が内側に働いているのです。そのことを意識することは、今の生き方を大きく変えるのではないのでしょうか。

さて、この信仰間答では、一方で将来のことも考えています。聖書が示す救いは、わたしたちの過去、現在、そして将来をも含む全体的、包括的なものであります。問58を読みましょう。「生涯の後」という表現は問57にもありました。今、すでにわたしたちはキリストに結ばれて、その永遠の喜びを心に感じている。その新しさを感じているけれども、この生涯の後にはもっとはっきりとその喜びを体験するだろう。それは「完全な祝福」であります。この地上では経験できない、もっと素晴らしい祝福された新しい人生がそこにある。

注意していただきたいのは、今もわたしたちはその喜びを先取りして味わっている。礼拝の最後に祝福がありますが、これはまさしく神さまの祝福をもってこの世の生活に遣わされるということです。そういう祝福を知っている。でも地上の歩みに

おいて、これを忘れる。罪に妨げられこの祝福に生きられない状態がある。でも生涯の後には、そういう状態からも解放され、神さまを永遠にほめたたえるようになる、完全な祝福を生きることができるのです。ヨハネ黙示録第4章8節以下を読みます。四六時中の礼拝。ここにわたしたちの究極的な希望があるのではないのでしょうか。

「完全な祝福」が約束されている人生をわたしたちは生きています。キリストの救いがこの完全な祝福をもたらしてくださいました。どんな人生であっても、わたしたちはこれに信じていることができるのは何と幸いでしょうか。ここに本当の希望があるのです。よく将来に希望が持てないということを言います。それはどこに希望の根拠を置いているかによると思います。今の現実を見て、そこに希望の根拠を置くなら、わたしたちは希望を持つことが難しいかもしれません。でもわたしたちの希望の根拠は、こちらではなく、あちらにある。あちらから来るものです。ルターは「外なる言葉」と言いました。わたしたちを生かし、人生に意味を与えるのは、自分のうちなる言葉ではなく、外なる言葉、神さまの言葉である。祝福もまた外から与えられるものです。今の現状がわたしたちの希望の源ではない。やがて神さまの方からもたらされる「完全な祝福」にこそわたしたちの本当の希望なのです。その約束を信じて歩んでまいりましょう。お祈りをいたします。